

問一

日本に渡来したキリスト教徒は、神が万物を分け隔てなく純粹に慈しむことを意味する「愛」という語が、日本語ではよこしまな不義に連なる意味をもつために、苦心の末に「大切」という語を用いざるをえなかったということ。

（解答欄 4 行）

問四

文筆家が恋愛を主題にする意味は、動物的本能や万古不易な事実を描くことや、万人に通じる答えを導出することではなく、書き手の生活や人生に即した真実を本質的に捉え表現しようとする人間固有の文化的営みだと考えている。

（解答欄 4 行）

問二

僅かな語で多様な表現ができる日本語の都合のよさに安心してしまつて、物事の本質を見極め知るために言葉を正確に用いる訓練がなおざりになっているのではという不安。

（解答欄 3 行）

問三

いざれ必ずそうなるとわかっている人生上の真実は、それを予め知っていたとしても、やはりそれに見舞われ後悔することが自明であるため、教訓としても意味がないから。

（解答欄 3 行）

問一

生物学の用語である「共生」という語が、単なる意味の変質ではなく、特定の価値観を正当化する主張の反復により権威化し、他を抑圧するように濫用されていること。

（解答欄 3 行）

問二

「人と自然との共生」という句は、人間の生には多様な選択の余地があるにもかかわらず、共生という事実をもとに特定の価値観が促す選択を要請するということ。

（解答欄 3 行）

問三

「共生」という語が、スローガンとして権威化して濫用される場合、その語が示す明瞭な事実性と、そこから要請される実質の具体化しえない曖昧で多様なイメージとの間に、大きな乖離がはらまれてしまうということ。

（解答欄 4 行）

問一

何かにつけて世の無常な様子に、わが身がいつ死ぬかわからない存在であることばかり思うので、折につけて、日常の行為にも、往生できるか心配だということも多く感じる
(解答欄 3 行)

問二

この世のすべてが永遠ではないという真理も、口先でどう説明するかは問題ではなく、わずかでも自分の心でよく考えて判断を下した上で理解すべきだということ。
(解答欄 3 行)

問三

往生を願う者は、日々の生活も、衣食住が常に保証されているわけではない旅と同じように考えてそれらに執着せず、この世に永遠の住処はないと思わなければならないということ。
(解答欄 3 行)